
パンツが自然と食い込む現象の名を僕達はまだ知らない。

美希マコト

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンツが自然と食い込む現象の名を僕達はまだ知らない。

【Zコード】

Z9879V

【作者名】

美希マコト

【あらすじ】

確かにある。確かに存在する。けれどそれは不確かで僕らは惑わされる。その現象に意味はあるのでしょうか？

(前書き)

後書きに解説を入れました。本編の意味が良く分からなかつた方は騙されたと思って後書きまで読んでみてください。未来は明るいです。

【パンツが自然と食い込む現象の名を僕達はまだ知らない。】

僕はあの日、草原にいた。

見渡す限りの縁の楽園は退屈な日常を吹き飛ばし、未来への希望を感じさせる。

クラスメイトの山田君が言っていた

「知ってるか、この星の光は何億年も前の光が今届いているんだぜ」

隣のクラスの笠原君が言っていた

「味噌汁は捨てます」

幼馴染の新見君が言っていた

「しゃべりいいいい、これしゃべきなのおおおおお、らめええええ
ええええ」

担任の向日坂先生が言っていた

「明日遅刻するわ、めんどくせー」

母さんは言っていた

「うふふ、あなたは公園で拾ったのよ」

父さんが言つていた

「貴様大人をなめているのか！！！ハツンは外せ、ハツンはパーティーから外せ、むさ苦しい。バー ラを入れろ」

これっぽっちの世界だけれど、僕等の世界は今日も、望まざとも回つてゐるのだ……

窓からす射す光が僕の脳を覚醒させる。その光で僕は何かを思い出す。

「いい？虫眼鏡で太陽を見てはいけないのよ」

そう、これだ。僕はとても大事な事を思いだした。これがなぜ大事な事かといふと、ここ何日か僕は「財団法人虫眼鏡で空を見よう」という団体から勧誘を受けていたからである。とてもしつこい勧誘は僕の入浴時間さえをも奪つた。

その団体があるうことが武力行使に出たのが昨日の話である。僕も負けじと子供の頃に両親にねだつたけど買ってもらえなかつたタンクのついた水鉄砲を隣の水城さんの宅の庭から無断で奪い取り応戦したのだが、結果は目に見えていた。

ちなみにココまで全部嘘である。

さて、平成の狼少年の異名を取る僕はまだ高校生。

朝、寝ながら食パンを食べると母に怒られ、登校時間ギリギリまで教育番組を見ては母に怒られる平凡な高校生。物語を語るには十分でない経験しかしていない高校生。けれど僕がこれから語るのは未完成の僕の懸命に足搔いた記憶の物語である。

「おはよっす！…………！」

坊主どもが僕に頭を下げる。体育会系の挨拶が飛び交う朝のグラウンドに僕見惨。この揺るぎない精神は高校3年間野球部在籍とう、今となつては言葉として、また僕の記憶として、もしくは履歴でしか確認できないものである。

坊主ども、愚かなり。所詮は弱小高、僕らがあの大坂にあると思われがちのあの大球場を目指すのは魔王が世界を救うくらいはあるはずのない、可能性を語るだけ無駄でしかない事柄なのである。

「先輩、ノックしてください！！」

坊主Dの戯言、虫睡が走る。このドMがツ、恥を知れ。僕は坊主Dを無視し、部室のドアをノックするだけという高等なギャグで坊主Dの心を犯した。僕はもう野球部ではない、つい先日引退したばかりだ。そういう季節なのだ。

体育館に近づくと、秋の足音がした。

「ちわーっす、秋でーっす」

くそつ、もうこんな所まで秋が来ているだなんて聞いていない。僕は動搖を隠せない。

「えへへ、ちょっと早いんですけどーー、来ちゃった」「間違いなく秋だ、恐ろしい。このままでは世界が危ない。

「させるかツ！！！」

その時だった、最後の力を振り絞り世界を照らす夏がテラスからやって来た。彼はまだ死んでない！！

「今年のあなたの出番はもう終わりよ……夏、観念なさい」「まだ、まだ……俺はまだやれる…………」

緊迫した展開に息を飲む。もしもこの戦いに夏が勝てば、もう少

し僕等の夏は続くのだろうか、そんな事を考える。

「一撃で終わらせてやるわ……食らえ！ 夕焼け紅葉…………あ、ごめんなさあーい、技名なんでしたっけ？」

はあ、と僕は溜息をついた。演劇の完成度はまだ高くない、夏の終わりの日である。

さて、古風かもしぬないが我らの学び舎には「番長」という称号がある。それを手にしたものはこの世の全てを手に入れられる

といつても過言ではない。番長には条件がある

- 1つ、誠の字の旗の元集まり者
- 1つ、革命起こしたりし者
- 1つ、神輿担ぎし者
- 1つ、魔を禁じ力を信じる者
- 1つ、正義貫きし確固たる信念ありし者

これらの要素は必要ない。

「お前、のこのこと登校してきたのか……」

しまつた、番長に見つかってしまった。僕は流し眼で番長の姿を確認した。

「番長、久しぶりだな……昨日以来か」

10数時間ぶりの再会で感傷に浸つている場合ではなかつた、その余裕ある言葉とは裏腹に僕は裏腹 すなわち背中で戦う準備を行つた。

「中華を覚えているか……」

戦闘態勢に入りかけていた僕は意表を突かれた、なぜこじで中華の名が出るのか、僕は必死で心当たりを探るが答えは見つからない。見つかるはずがないのだ、僕は中華といえば中華料理しか知らない

からだ。

「昨日の夜、チャーハンを食べた」

番長が重い言葉が僕の心奥底まで響いた。やはり中華料理で正解だつたとこの時僕は初めて自分の有能さに気が付いた。

「そ、そそそ、そうか。美味かつたか？」

あくまでポーカーフェイスに、動搖を悟られないように、僕はさりげなく繋ぎの1文を入れた。

「不味かつたぜ」

ゴングは鳴った、サイは投げられた、戦いの火ぶたが切られた。

「おらッ！――！」

「鈍つたな、番長！――！」

僅かな筋肉の動きだけで僕は動き出す、右に左に、番長から繰り出される霸道の波動を紙一重でかわす。僕は負けるわけにはいかない、体操服をズボンの中に入れているヤツなんかに負けるわけには

……

「くつ……くそお」

しかし戦いの終わりはあつけなかつた。僕の我流ブレイクダンスの動きに番長のガバディーはあつけなく敗れた。

「他愛無い」

地面にひれ伏す番長、そして振り向かず立ち去る僕の構図はまるで原住民とシティボーイだった。

戯れは終わった。

「ま、待て……」

まだ立ち上がるのか、番長。お前の不屈の精神に僕も応えるため、1年生4月に嫌というほど練習させられた集団行動の回れ右をきつちり1・2・3のリズムで決め、向き直つた。

「お前の慢心、必ず自らを蝕んでいくぞ……ガクッ」

甘い、甘いよ番長。僕が作ったチョコレートケーキよりも甘いよ。

僕がそんな初步的なミスを――――――

しまった……」、これが番長の力――――

1歩また1歩進むたびに脳を震める違和感。この違和感の原因はなんだろうか。対処法はなんだろうか。事前の対策はどうすればいいのだろうか。僕だけの現象なのだろうか、それとも誰もが通る道なのだろうか。

元に戻す　それはつもりだった。

数歩で危険領域へ。

元に戻す　それはつもりだった。

数歩で最終防衛ラインへ。

どうする事も出来ないもどかしさ。無力な人の末路。

確かに食い込むパンツに僕は苛立つ。

「なんで!? どうして!?　――――――――――」

一度動き出した歯車はもう止まらない。川の流れは止まらない。食い込むパンツも……止まらない。

「ちくしょおおおおおおおお――――番長おおおおおおおお貴様、俺に何をしたあああああ――――」

答えは誰も教えてくれない。

世界の秘密は自分で見つけなければならない。

言葉があつて初めて成り立つものがある。

誰が人を人と呼んだのだろうか、誰が火を火と呼んだのだろうか。

何でもよかつた。誰かが勝手に決めただけ。

ならばと僕も考える。この現象の名を考える。

もし人生に正解があるならば、僕は不正解だらう。

不正解者は不正解者社会の中で正解を探す。既に間違ったという事を忘れ正解を探す。もう戻れないと知りながら。

正解者は見下す。既に無意味だと嘲笑う。

正解者は正解者社会の中で更なる正解を探す。高みを目指す者として、次のステージを目指す。

そこに意味はあるのか、いやない。

僕等は誰かの掌で生きているわけではないのだ。

僕は僕しか知らない。

自分と、それ以外。決して一つになる事はない。それだけが事実。

不正解を正解にするのは自分自身であり、そこに他者の介入は許されない。影響はあれど決定権はない。

「その不正解は正解なのかな」

自問自答し、僕は天を仰ぐ。

「不正解のままでいいんだよ、自分自身が許しても、社会がそれを許さないよ、それは不正解だよ」

社会という名の防壁と一般論という名の守護の盾。

「その壁を超える力が欲しいんだ

超えた先に待つ一体感や安心感、それを求める。

神様はお客様なのではない、お金こそが神に匹敵する力を持ち合わせている。

真理とは意外と身近な所に落ちている。転がっている。よつて誰でも掴む事が出来る。

しかし、溝に落ちたチャンスをわざわざ掴もうとする者はいない。空に浮かぶチャンスは皆が無理だと諦める。

「けれど、その拾うだけのチャンスは先人達が掴んだ道
確かにチャンスは転がっている。しかし何がチャンスなのかが分
からない。

そのチャンスを見極める力が必要なのだ。

見つける力と創造する力

あなたはどうちらが欲しいの？

「僕は…………」

躊躇う。躊躇する。

「与える事は簡単だ。しかし、あなたに掴む事ができるのか？その偽りのチャンスを掴む事ができるのか？見つけることさえ出来なかつたそのチャンスを、果たして掴む事が出来るのか。

「結局は、そういう事だったんだね……」

とんかつを見て、豚だつた姿を想像する事ができるの？

完成されたビルを見て、木や鉄などの素材を想像する事ができるの？

音の滴から旋律が、和声が、律動が

「けれど価値がある。意味とは別に価値がある。無意味な人生はなくとも、無価値な人生は存在する」

その価値は自分自身にとつても無価値かい？

「意味は決められるけれど、価値は社会が決める」

それで納得できるのかい？

「しなければならない事もある、僕はそう思つ」

拝啓、晩夏の候、いかがお過ごしでしょうか。

僕は今、草原に居ます。誰もいない草原に居ます。

ここには何もない。

けれど空はあり、草は生え、鳥は飛ぶ。

ここには何もない。

そういうえば、昔は気が付かなかつた物の存在に気が付きました。

届かなかつた箪笥の上段にある染みや、見上げなかつた近所の商店の看板。

それらは知識ではない。いつだつて存在したもの。

生まれた時から箪笥は置かれていたし、商店も営業していた。

どちらも気が付かなかつただけのもの。けれどいつだつて見られ

たもの。

そういうものが誰にでもある世界。

ここには何もなければ、何かがきっと何処かにあります。

僕はこの自然とパンツが食い込む現象について名を「えるべきかどうか迷っています。

それは何物でもない胎児に名を「えることと何ら変わりありません。
ん。

名を「えられた胎児は次の瞬間から一生その名で呼ばれる存在となります。

僕はこの自然とパンツが食い込む現象について名を「えるべきかどうか迷っています。

もしかすると気が付かなかつた箪笥の染みや商店の看板のように、知らなくてもいいものかもしれません。けれど知つた事で見える世界がある事を僕は知っています。

進むとはそういう事なのだと僕は考えます。何の才能もない僕だけど、血らの世界を広げていく事で何かを見つける可能性を広げていいくことが出来るようです。

僕はこの自然とパンツが食い込む現象について名を「える事の意味と価値について、はつきりと分かりました。

自然とパンツが食い込む現象に名を「える事には、何の意味もないし、何の価値もありません。

敬具。

(後書き)

この作品で読者様に伝えたかった事が一つだけ、たった一つだけあります。私からの大切な言葉であり、それだけで未来が見えてくるような。今作はその1文を伝えるだけの為に書きました。一生懸命書きました。

私はこの言葉をもつと多くの人に届けたいです。

「しゃ」いいいい、これしゃきなのおおおおお、りめえええええええ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9879v/>

パンツが自然と食い込む現象の名を僕達はまだ知らない。

2011年10月8日23時28分発行